

成と課題のタイプとの交互作用効果を検証する。

その際、問題解決課題において異質集団の方が等質集団より優れた成績を示したという白樫(1978)の結果に、時間的推移の要因がどのように関わっているかをも、同時に検討する。

方法

第1実験の方法を基本にして、次のような改良を行った。

- 1) 1 集団の構成人数を5人にした。少数派が2人にまで広がることによっていっそう集団らしい特徴が現れるであろうと期待されたからである。
- 2) データに含まれる男女のウェイトを等しくするため、男子集団と女子集団を同数(それぞれ16集団ずつ)編成した。
- 3) 創造性検査の代わりに、問題解決課題を用いることにした。これは白樫(1978)の課題と同種のものである。
- 4) 時間的推移の効果をはっきりさせるため、各集団は1期20分のセッションを3回計60分間、同一タイプの課題に取り組んだ。因みに、第1実験では各集団が2種のタイプの課題をそれぞれ15分間ずつ行った。

5) 課題に対する動機づけその他を測定する質問紙を白樫(1978)のものに近づけた。

6) 従属変数の分布の正規性を仮定することを避けて、差の検定にノン・パラメトリックな方法(主として、Mann-WhitneyのUテスト)を用いた。

具体的には、以下に述べる通りであった。

被験者と集団編成: 被験者は大学生男子80名、女子80名、計160名で、実験に先立ちRotter(1966)のlocus of control尺度の日本語版(吉田・白樫, 1975)によってIE得点を測定された。これらの被験者から、1集団内のIE得点の平均が一定で分散が大きい同性の5人集団を16集団(男女8集団ずつ)と分散が小さい集団を16集団(こちらも男女8集団ずつ)計32集団編成した。各集団のIE得点の構成は表7に示す通りであった。

表の最下行に見るとおり、IE得点の集団平均の中央値は等質集団、異質集団ともに約12とほぼ等しく、得点の標準偏差(SD)は前者で1.14と小さく、後者で4.53と有意に大きい。

なお、g01からg08までとg17からg24までは男性集団、残りのg09からg16までとg25からg32までが女性集団である。

表7 等質・異質集団の成員構成 (IE得点の分布)

等 質 集 団					異 質 集 団										
Gr. I. D	成員のIE得点				平均	SD	Gr. I. D	成員のIE得点				平均	SD		
g01	12	12	13	13	14	12.8	0.75	g17	6	7	16	16	17	12.4	4.84
g02	9	10	12	14	14	11.8	2.04	g18	5	8	14	18	19	12.8	5.49
g03	10	12	12	13	14	12.2	1.33	g19	5	8	10	14	21	11.6	5.54
g04	10	10	11	11	14	11.2	1.47	g20	5	7	9	16	16	10.6	4.59
g05	10	11	12	12	13	11.6	1.02	g21	9	10	10	14	14	11.4	2.15
g06	10	11	12	12	15	12.0	1.67	g22	8	9	9	15	15	11.2	3.12
g07	10	10	11	12	13	11.2	1.17	g23	10	15	15	15	16	14.2	2.14
g08	10	13	13	14	14	12.8	1.47	g24	5	8	13	14	16	11.2	4.07
g09	12	12	12	12	12	12.0	0.00	g25	6	9	13	14	21	12.6	5.08
g10	11	11	12	12	13	11.8	0.75	g26	8	11	11	16	17	12.6	3.38
g11	10	12	12	13	13	12.0	1.10	g27	8	8	10	18	19	12.6	4.88
g12	11	11	12	14	14	12.4	1.36	g28	6	8	9	15	16	10.8	3.97
g13	12	12	12	13	13	12.4	0.49	g29	8	10	13	15	17	12.6	3.26
g14	11	12	12	13	14	12.4	1.02	g30	4	9	11	16	16	11.2	4.53
g15	12	12	12	14	14	12.8	0.98	g31	6	6	7	11	21	10.2	5.71
g16	10	12	13	13	14	12.4	1.36	g32	7	8	10	15	19	11.8	4.53
中央値					12.1	1.14					11.7	4.53			